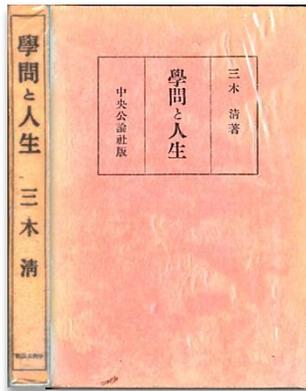




鹿沼の自然・栃木の旅

月報第41号

(2016年2月)



いったい読書は何に始まるのであろうか。言うまでもなく、何等かの書物に出会うことに始まるのである。恰も対話が或る人間に出会うことに始まるように。読書は一つの邂逅である。事実誰でも、自分の読書経歴を振り返ってみると、読書がそれぞれの邂逅であったということに思いあたりに相違ない。少くとも自分に大きな影響を与えた読書はつねに邂逅である。それは自然現象の如きものでなく一つの歴史的事件である。そのために読書が科学的でないということとはあり得ない。自然現象を研究する科学者の活動にしても、それ自身一つの歴史的事件であるのであるから。邂逅は歴史の根源的な形式である。ところで邂逅という言葉は何か偶然的なものを意味している。事実、読書には偶然的なところがあり、この偶然性が読書の楽しさを増しさえするのである。多くの場合我々は偶然或る書物に出会い、そして読み始める。(中略)恰もソクラテスが市場や街道や体操場で偶然出会った誰れ彼れを捉えて対話を始めたように、私は偶然めぐりあった書物を取って読み始める。

三木清『学問と人生』(詳細は4頁から)

北光クラブ

自然観察クラブ 鹿沼



三轟山ハイキング

下つ毛野御鴨ノ山の小楢のす、まぐはし子ろは誰が餉か持たむ

(万葉集巻 14・東歌・3424)

岩舟、藤岡、佐野の境界に聳える三轟山に登ってみましょう。途中、昨年2月の唐沢山行で、大木の枝の撤去作業のため入ることのできなかった村檜神社を再度訪ねます。村檜神社は、中世以降、領主小野寺氏や唐沢山城主佐野氏の崇敬をうけ、佐野荘小野寺10郷の惣鎮守であったと伝えられます。現在の本殿は、天文22(1553)年に再建されたものですが、室町時代の建築様式をよくのこし、栃木県内ではたいへん珍しい三間社の春日造りの隅木(隅垂木)つき、屋根は檜の皮で葺いた県内唯一の檜皮葺です。三轟山の北麓、かたくりの里に車を置いて三轟山の山頂をめざしましょう。山頂からさらに南北に延びる稜線をたどって中岳を越え奥社へ。ここから富士見台まで登ってみます。空気が澄んでいれば富士山、筑波山、そして渡良瀬遊水池も見えるはずです。奥社に戻って三轟神社に下り、東麓をたどってかたくりの里へ戻ります。途中、慈覚大師誕生の郷を見学しましょう。慈覚大師円仁の誕生地とされる地は壬生寺にもありましたね。かたくりの里に戻り、「大坊山行」で行くことのできなかった惣宗寺(佐野厄除け大師)に参詣し、帰路に着きます。



三轟山

日 時：3月13日(日) AM6:00 北小西門集合 (AM6:24 東武新鹿沼駅)
 行 程：北小——新鹿沼駅——葛生——村檜神社——大慈寺——かたくりの里
 ……三轟山……三轟の関所……中岳……奥社……富士見台……奥社
 ……三轟神社……慈覚大師生誕の地……かたくりの里——惣宗寺
 ——佐野田沼IC——新鹿沼駅——北小

服 装：防寒着、帽子、手袋、軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、水筒(ポット)、弁当、おやつ、雨具、お手ふき、

ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート、スパッツ
必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、LED ランプ、ストック、

参考書（栃木の山 150、栃木県の歴史散歩、とちぎの社寺散歩、
とちぎの天台の寺めぐり）、

1/25,000 地形図は「佐野」「下野藤岡」

参加費：おとな 600 円、子ども 300 円（ガソリン代等）

保険料（今年度分）1,300 円



惣宗寺
(佐野厄除け大師)

☪ 今後の活動予告 ☪

3月25日（金） 千手山・地面のお花見会（主催：鹿沼大学）

AM10:00 千手山観音堂集合

4月 3日（日） 東京・小下沢より景信山・高尾山～早春の草花の観察～

4月17日（日） 千手山・御殿山ハイキング～探検・鹿沼城址～

問合せ&申込み：電話 090-1884-3774（阿部）



☪ 本号の内容 ☪

山行案内	三轟山ハイキング	2
今後の活動予定		3
表紙の本	三木 清『学問と人生』付・西田幾多郎先生のこと	4
活動報告・1	初日の出を見る会～茂呂山からの展望・山岳同定～	10
活動報告・2	足利・大坊山ハイキング～山上城址と古墳群探訪～	10
山口さんの自然講座	エノキの方言について／茂呂山の自然を考える	15
山書談話室		17
愛書家のひとりごと	三木清ののこした哲学・人生論	18
編集後記		19

三木 清『学問と人生』
(昭和17年3月15日・中央公論社発行)

読書論

—

もし読書の精神ということがいえるなら、読書の精神は対話の精神であるといいたい。精神というのは、その純粋な形、本質的な在り方という意味である。この精神は抽象的なものでなく、精神が同時に方法でもある。読書は対話の方法に依らなければならぬ。ところで対話の精神はまた哲学の精神であるということが出来る。ソクラテスが、そしてプラトンが、対話を哲学の形式としたことは、哲学的精神の根源的な発現であった。それ以来、すべての創造的な哲学はソクラテス的及びプラトンの対話へのそれぞれの復帰であった。対話は哲学的生命の運動の根本的な形である。そこでまた読書の純粋な姿は哲学的であるということが出来るであろう。しかるにこの哲学の精神は科学の精神と別のものではない。歴史的に見てもそうであるように、本質上からいっても、哲学的精神は科学的精神の根源的な形であり、或いはその図式である。ソクラテス的対話とは何であるか。決して終ることのない探究である。そして科学とはこれ以外の何物であるか。従ってまた読書の精神は科学的であるといわねばならぬであろう。

いったい読書は何に始まるのであろうか。言うまでもなく、何等かの書物に出会うことに始まるのである。恰も対話が或る人間に出会うことに始まるように。読書は一つの邂逅である。事実誰でも、自分の読書経歴を振り返ってみると、読書がそれぞれの邂逅であったということに思いあたりに相違ない。少くとも自分に大きな影響を与えた読書はつねに邂逅である。それは自然現象の如きものでなく一つの歴史的事件である。そのために読書が科学的でないということはある得ない。自然現象を研究する科学者の活動にしても、それ自身一つの歴史的事件であるのであるから。邂逅は歴史の根源的な形式である。ところで邂逅という言葉は何か偶然的なものを意味している。事実、読書には偶然的なところがあり、この偶然性が読書の楽しさを増しさえするのである。多くの場合我々は偶然或る書物に出会い、そして読み始める。それを我々は本屋の新刊書の列から見付けたこともあろう、或いはそれを古本の堆積の中から見出した

こともあろう、或いはまたそれを図書館のカードの中に発見したこともあろう。恰もソクラテスが市場や街道や体操場で偶然出会った誰れ彼れを捉えて対話を始めたように、私は偶然めぐりあった書物を取って読み始める。もちろん計画的な読書というものもある、そしてそれは甚だ必要である。しかし計画的な読書は読書の精神からいうと寧ろ第二義的なもの——やがて私は読書の第二の形式としてこれについて語るであろう——であるように思われる。少くとも読書の楽しさは計画的な読書にはないといえるであろう。いずれにしても重要なことは、計画的な読書もその根源に溯るとつねに一つの邂逅であるということである。例えば、計画的な読書というのは誰か教師に示された通りに読書することである、しかるにその人が私の教師であるということは一つの邂逅ではないか。また計画的な読書というのは何かの本に挙げてある文献から考えて読書することである、しかるにその一冊の本を私が初めに見たということは既に邂逅ではないか。更に自分自身で計画を立てて読書する場合においても、我々が手懸りにするのは研究室とか図書館とかの目録である。しかるにそこに我々がそれらの本を見出すということも既に一つの邂逅ではないか。これは、あらゆる書物が我々人間と同じように歴史的な存在であることを考えると、何の不思議もないことである。書物にめぐりあうことには人間にめぐりあうのと同じ悦びがある。読書の悦びはかような邂逅の悦びである。しかるにまたあらゆる歴史的な事件が単なる偶然でないように、読書における邂逅も単なる偶然ではない。邂逅という言葉はまた或る必然性を意味するのでなければならぬ。全く偶然に出会ったようであっても、それがやはり必然であったと、うなずくことができるものが、邂逅と考えられるのである。それは単に外的な必然性でなく、寧ろ内的な必然性である。かくてソクラテスとプラトンとの間には邂逅があった、ゲーテとシルレルとの間には邂逅があった。読書においても同じように、或いは師としての、或いは友としての、書物に対する邂逅があるであろう。一生かような邂逅を経験しなかった者は、どれほど多く本を読んだにしても結局何も読まなかったに等しい。しからば如何にして我々はかような邂逅を経験し得るのであるか。みずから求めることによって。求めることのない者はめぐりあうこともないであろう。仮にめぐりあうにしても、それと気付かないでしまうであろう。何かを求めて読書する者のみがそのような邂逅を経験し得るのである。しかしながら全く知らないものを如何にして我々は求めるであろうか。求めるというには、そのものを何等か既に知っているものでなければならぬ。そのものに既に何等か出会ったことがあるのでなければならぬ。かようにして既に探究の以前に邂逅があったといい得るであろう。そこにプラトンのアナムネシス(想起)説の真理があると考えられるであろう。しかし認識は想起であるというプラトンにおいて、それに至るまでの長い探究

(次ページへ続く)

の対話がある。邂逅は対話を不要にするものでなく、寧ろその必然的な条件である。もちろん我々は我々の出会う誰とも立停まって対話するのではない。或る人に対しては黙って彼を行き過ぎさせるであろう、また他の人に対してはただ簡単に挨拶してみずから過ぎ去るであろう。我々の出会う書物の中にもこの種のものが多い。そしてそれぞれの書物をそれが扱われるべきように扱うということが正しいのである。どんな本であっても買った以上は詳しく最後まで読まなければならぬように考える一種の吝嗇は、読書においても愚かなことである。真の対話を促すような邂逅であって初めて真の邂逅と称することができる。そのような書物は我々の生涯の師となり友となるような書物である。かくてそれを読むことが真の対話であるような書物は第一流の書物であるということになるであろう。読書の方法は対話の方法、従って弁証法——弁証法とは元來対話の方法であった——でなければならぬというのは真理である。ただ、すべての書物をこのように対話的に読まなければならぬと考えることは正しくないであろう。或る書物は寧ろ顔だけ見れば宜いのであり、また或る書物は簡単に挨拶して通れば宜いのである。読書の方法は唯一つであるのではない。この単純な真理を会得することが大切であると思う。尤も、対話は読書の本質的な形として、あらゆる場合、読書の根底には対話がなければならず、またあらゆる場合において読書は深まるに従って対話になると考えられるのである。ところでプラトンにおいて認識が想起であるということは探究が愛もしくはあこがれに動かされることを意味したが、そのように読書はその純粋な姿においてあこがれからの、もしくは愛からの読書であるといひ得るであろう。

ともかく、如何なる意味においてであるにせよ、読書は書物に出会うことから始まる。しからばそれは何に終るであろうか。ソクラテス的対話は決して終ることのない対話であった。そのように読書も元來決して終ることのないものである。これが対話としての読書の本性である。著者が我々に問を掛ける、或いは我々が著者に問を掛ける。その際我々は勝手な質問をなし得るのではない。勝手な質問に答えてくれるのは百科辞書くらいのものであり、それすら多くの場合極めて不完全にしか答えてくれないであろう。我々は何よりも著者の言葉を聴き、その意味を理解するために読書するのである。けれども、ただ単に彼の言柴を聴いているのみではその意味を真に理解することができないであろう。我々は問を掛けなければならぬ。この問が勝手なものでない限り、我々が著者に問を掛けることは著者が我々に問を掛けていることである。かように我々に問を掛けてくる本が善い本なのである。そうでなければ、平凡な教科書が最も善い本であることになるであろう。しかるに世の中には自分一人で講義している本、自分一人で演説している本、自分一人で喋りをしている本というように、「自分一人

(次ページへ続く)

の]本がなかなか多い。著者の陥り易い危険は自己陶醉である。尤も、独白という形式もある。けれども真の独白には自己陶醉はない、それは寧ろ神との対話である。自分一人で喋っている本も全く無益であるわけではない、そのような本はしばしば楽しい本である。我々は教養や研究のためにばかりでなく、休養や娯楽のためにも読書する。仕事としての読書を継続させるには休養や娯楽のための読書を忘れてはならないであろう。しかし最良の本は我々に絶えず問を掛けてくる本である。かくして問答が始まる。問は問に分れ、答は新たな問を生み、問答は尽きることなく発展してゆく。そして我々は邂逅の悦びを感じる。もちろん我々はずねに一冊の本の傍に停まっているわけではない。一つの対話は他の対話に、言い換えると著者の一つの本から他の本へと連れてゆくであろう。更にまたそこから必然的に他の著者へと導かれるであろう。一冊の本を読んで、他の本を読もうという欲望を起させないような本は、善い本ではない。かくしておのずから読書に系統が出来てくる。読書が系統化し始めるに至って、ひとは真に読書し始めたということができる。そのとき、あの一冊の本を開いたことは自分の心を開いたことであつたのである。今や読書の歴史は自分の生長の歴史になる。そのような書物においては、或いは一年を隔てて、或いは十年を隔てて、幾度となく、種々様々の機会に、我々はそれに還ってくるであろう。そして我々はその邂逅が偶然でなかつたことを信じるに至るのである。

西田幾多郎に憧れて京都大学に進んだともいえる三木清、「先生」について語ります。

西田幾多郎先生のこと

西田先生に初めてお目にかかったのはちょうど先生が『自覚に於ける直観と反省』を書き上げられた頃であつた。「この書は余の思索に於ける悪戦苦闘のドキュメントである」と云われているが、先生に接して私のまず感じたのは思想を求めることの激しさであつた。私は嘗て先生の如きほんとの意味において激しい魂に会つたことがない。

この激しさは先生がつねに何物かに駆り立てられて思索していられることを示すものである。それは先生のうちに深く蔵せられた闇、運命、デーモンと云つても好いであろう。先生の哲学から流れてくるあの光はこの闇の中から輝き出したものである故にそれだけ美しいのである。先生は早くからロシア文学を好んで読まれたようであり、つい最近にも、ドストエフスキーは非常に面白いと話していられた。意味深い事実である。先生は自分自身に大きな問題を負うて生れて来られた。この問題の大きさが先生の哲学を大きくしているのだと思う。

(次ページへ続く)

しかしこの魂の底にはその激しさにも拘らず自然のような限りない静けさがある。絶えず矛盾するものを生みながらどこまでもそれを包んでいるものがある。先生において驚かれるのはその執拗な追求力と共にその思索の度胸ともいべきものである。真の体系家となるには思索の度胸が必要だと私は考えるのであるが、先生のそれにはまことに遅いものがある。かような度胸は決して簡単なものではない。愛の激しさと共に深さを有する者にして初めて得られるものである。

先生の直観力も珍しい。本の批評とか人物の批評とかを伺うと、先生はたいい一言でずばりと云ってのけられる。その大胆さにも、その的確さにも恐いものがある。この直観力が先生の基礎にあると思うが、かように大胆に見える直観力にはつねにイメージが伴われているものである。先生の哲学は論理だけで出来たものでない。論理の以前に豊富な直観とイメージとがある。先生の論理はこの直観とイメージとを活かすためのものであり、そこに新しい論理が生れ、この論理の不思議な強靱さがある。硬いようでも脆い論理がある。先生の論理は現実によって鍛え抜かれたものである。

先生の哲学の深さは誰でも云うことであるが、その広さも考えなければならない。先生の広さはお目にかかって色々話してみれば分る。その関心もその教養も極めて多面的である。しかもそれぞれの物の本質や鋭い直観力によって先生の哲学の立場から掴んでいられるのである。先生の書かれた論文は極めて行届いたものである。かように行届いたところは思索の執拗さと綿密さとに基くことは勿論であるが、単にそれだけでなく、思索の広さというものがなければならぬ。一見甚だ論理的で綿密なようであっても、大きなところ、肝心なところが抜けていたり、よく考えられていなかったりするものが少くないのである。先生の哲学の深さは感じだけでも分る、その広さは自分で考えることができるようになって初めて分るのではなからうか。

最近の先生の思想は円熟して愈々完璧に近づいたが、先生がいつまでも若さを失わないでいられるのも驚くべきことである。停年で大学を退職されて後先生のように多くの仕事をされ、しかもその思想が発展を続けていったというのは日本人としては全く異例であると云って好い。求めることの如何に激しいかを現わすものである。

世に哲学の教授は多い。しかし真の哲学者というものは極めて稀である。明治以来日本の社会において歴史的な仕事をして来た人は世間で「哲学者」と云われるよりも「思想家」と呼ばれる型の人であった。西田先生が初めて「哲学者」としてそれらの思想家に匹敵する以上の歴史的な仕事をされたのである。

(「婦人画報」昭和12(1937)年12月)

人物紹介・西田幾多郎

にしだ きたろう、1870（明3）年5（旧4）月19日－1945（昭20）年6月7日
明治～昭和時代前期に活躍した日本を代表する哲学者・文学博士。京都大学教授、のち
名誉教授。京都学派の創始者。号は寸心・松塙。

旧石川県河北郡宇ノ気村生まれ。師範学校、第四高等学校を経て東京帝国大学選科へ進み、卒業後は地元石川を拠点に山口、東京と教職を転々。母校第四高等学校ではその勉学に取り組む姿勢により、生徒から「デンケン（ドイツ語で「考える」の意味）先生」と親しまれる。この間、家庭の不幸など物心両面の苦悩のうちに参禅の経験を重ね、寸心の号を得る。

「哲学の動機は人生の悲哀でなければならない」

1910（明治43）年40歳のとき、京都帝国大学文科大学助教授として京都へ赴任、哲学、倫理学、宗教哲学を講ず。翌年、近代日本哲学の最初の独創的著作となる『善の研究』の出版を皮切りに、次々と論文を発表、思索が「西田哲学」（西洋哲学の伝統と対決しつつ禅などの東洋思想を統合、これを「場所」「絶対無」「絶対矛盾的自己同一」などの理論で表現する宗教的色彩の強い思弁哲学）として確立していく。1913（大正2）年文学博士。1928（昭和3）年58歳で退官。

著作はほかに「思索と体験」（大正4）「自覚に於ける直観と反省」（大正6）「意識の問題」（大正9）「芸術と道徳」（大正12）「働くものから見るものへ」（昭和2）「一般者の自覚的体系」（昭和5）「無の自覚的限定」（昭和7）「哲学の根本問題」（昭和8）「場所的論理と宗教的世界観」（昭和20）など。

退官後は夏と冬を鎌倉で、春と秋を京都で過ごす。

1940（昭和15）年文化勲章受章。

1945（昭和20）年6月7日、七里ヶ浜近くの自宅で没す（75歳）。遺骨は故郷かほく、壮年期を過ごした京都、終焉の地鎌倉に分骨、埋葬。

「私の生涯は極めて簡単なものであった。その前半は黒板を前にして坐した、その後半は黒板を後にして立った。黒板に向かって一回転をなしたと云へば、それで私の伝記は尽きるのである」



昭和10年10月
鎌倉・西田邸にて
西田幾多郎と三木清



西田幾多郎『善の研究』
大正10年3月18日
岩波書店発行

活動報告・1

初日の出を見る会 ～茂呂山からの展望・山岳同定～

1月1日（金） 天気・はれ



2016年の初日の出

厳しい冷え込みの元旦になりました。

呼びかけが遅かったせいもあり、今回は内輪のみでの小“山行”。初日の出を見に来た人のため特別に開門された花木センター駐車場に我々も車を止め、茂呂山山頂までひと登りしてのご来光となりました。いつの間にか雑木が切り払われて山道がずいぶんすっきりしてしまい、大木、珍しい樹木、

気に懸けていた樹々が姿を消して、植物のみならず生物相が貧相になることが懸念されます。

新年早々そんなことを考えながら山頂に到着、同じようにこの好展望の地でのご来光を目指してきた人々に交じて木製の3層の展望台に螺旋状の階段を上がりながら、6時53分、2016年の初日の出を拝むことができました。

その後、360度の展望を眺めます。山頂周辺の木々が育って、すべてが見渡せるわけではありませんが、南方に筑波山、北方は近くに古賀志山、遠方に日光連山がぼんやりと見えました。そして眼下に広がるは、新年の眠りにまだ^{まだ}微睡んでいる、わが街鹿沼。今年も有意義な活動ができますように。



上空には20日の月

活動報告・2

足利・大坊山ハイキング ～山上城址と古墳群探訪～

1月17日（日） 天気・はれ

北関東自動車道が開通して足利はぐんと近くなりました。その足利の標高285mの山なら楽勝かと思いきや、大坊山はなかなか侮れない山でした。

まずは足利ICからほど近い樺崎八幡宮へ。大坊山の北側に当たります。鎌倉初期の足利氏による創建当初の樺崎寺跡が史跡として整備中で、復元されつつある広大な庭園に、発祥当時の足利氏の隆盛を見るようでした。

車で山麓をぐるりと回って南側の市街地に入ると、住宅街に接して長林寺があり、背後に広がる大坊山の登山口になっています。山あいには響き渡る法螺貝の音に迎えられて、いよいよ登山開始。

登り始めは長い石段。息を切らして登り切ると、天狗の面をまつた奥の院があり、この後も所々に石碑や祠があって、信仰の山であることを感じさせ



大坊山頂にて

ます。それ以上にハイキングコースとして親しまれているようで、度々登山者に会い（指導者講習のグループもいました）、案内の道標も方々にありました。途中で、あの法螺貝の音の主、しっかりと装束に身を固めた山伏さんにも会いました。道なき道を進んで行き、その後も方々で貝を吹いているのが聞こえました。

肝心の「大坊山」の山頂にはなかなか到達できず、連綿と続く峰を登ったり下ったりの繰り返しが続きます。例によって意外と時間がかかり、巨大な「大坊山頂」の石標が立つ広場にやっと到達したときは、すでに日が暮れかかっているような気がしました。ここで遅い昼ごはん。ここから麓の大山祇神社まではほぼまっすぐな石段と下山道。途中から住宅街に入りますが、沿道にはハイカーのために案内図を用意している家があったり、地元の山を盛り上げようという地域挙げての空気を感じます。

住宅街の中に、車を止めたお寺がやっと見えてきました。古墳めぐりや、厄除け大師詣でや、郷土博物館は今回も時間切れで見送りとなりました。

✿ 参加者

佐々木伸二、西山弓子、渡辺加代、石崎裕子、阿部良司・みゆき（計6名）

✿ 見た植物

アオダモ、アカシデ、アカマツ、アカメガシワ、イチヨウ、イヌツゲ、キツタ、キリ、ケヤキ、コウヤボウキ、コナラ、シラカシ、センダン、タカオモミジ（植栽）、ツルグミ、テイカカズラ、トウカエデ（植栽）、トウネズミモチ、ナンテン、ネジキ、ノキシノブ、ヒイラギ、ヒサカキ、ホオノキ、マンリョウ、モミ、ヤツデ、ヤブツバキ、ヤマコウバシ、ヤマツツジ、リョウブ、ロウバイ（植栽、写真）



榊崎八幡宮のロウバイ
ほんのりいい香り♪

✿ 見た・聞こえた鳥

エナガ、カケス、ハシブトガラス、ヒヨドリ、メジロ

❁ 参加者からいただいたおたより

平成28年1月17日(日)、まだ正月気分のぬけぬまま、初めて参加させて戴きました。

低い山だと聞いていたのですが、低山をいくつか越えて、やっと大坊山に着きました。

雪の浅間山を垣間見て、上州、下野の山の碧さが印象に残るところでした。

修験僧が山道を開いているという事でしたし、高野ぼうぎの群落もあり、常緑樹もたくさんあり緑に恵まれた山でしたネ。

頂上でお昼にし、ホットドック、おしろこ等に舌鼓をうち、下山致しました。足利の歴史もちょっぴり勉強し、6人でわきあいあいと本当に楽しく小さな旅でした。

いろいろとお世話になり有難うございました。又何かの折には宜しく願い申し上げます。

冬の峰 法螺の響もす 山社

(渡辺加代)



冬の山道の彩り
コウヤボウキ

暖かい日和に恵まれ、足利に向った。まず樺崎寺へ。源義家の曾孫の足利義兼が、戦勝祈願のため樺崎寺を建立した。八幡山の中腹に樺崎八幡宮が祭られており、周囲は広々として、浄土庭園の復元整備が進められている。整備後の浄土庭園をぜひ見たいと思う。



さて、長林寺に車を置き、大坊山へ向った。285.4m であるが、小さなピークをいくつも越えるうち、行者姿の人に出会う。このあと、この方の法螺貝を遠くから近くから聴くことになる。阿部さんにお世話になりながら山頂で昼食。温かいお汁粉やコーヒーを阿部さんから振舞われ、楽しい食事になった。

そのあと、大山祇神社を経て長林寺に戻った。低い山であったが、登り甲斐のある、充実した一日になった。

法螺貝や峰々わたる山始め

(西山弓子)

❁ 大坊山めぐりの風景



榊崎寺復元案
この後ろで大規模工事中



←榊崎八幡宮正面と本殿↑
幕には足利氏の紋が

建造物

榊崎八幡宮本殿

桁行二間 梁間二間 西側面は高欄付緑張
銅板葺 江戸時代

榊崎八幡宮は、正治元年（一一九九）、足利義兼の生入定の地に八幡神を勧請し、義兼の霊を合祀したことに由来する。

本殿は、天和年間（一六八一〜一六八四）の再建といわれ、昭和六十三年度・平成元年の保存修理で、本来の造りであった隅木入春日造（軒唐破風）に復元した。

この建物は、意匠上においても種々の面で卓抜したものがあり、歴史的由来とあわせて価値の高い建造物である。

（昭和六十一年九月二十四日 足利市指定）

※ 足利義兼は、奥州藤原氏征伐の後、建久年間（一一九〇〜一一九九）、この地に下御堂（法界寺）を創建した。

義兼は正治元年、当地にて入寂、その子義氏は、法界寺の諸堂宇を整備するとともに八幡神を勧請した。

足利將軍家の衰退とともに法界寺もその庇護するところを失い、現在では榊崎八幡宮を残すのみである。

平成二年三月

社団法人 足利市民文化財団
足利市教育委員会

榊崎八幡宮本殿の説明板、中世鎌倉時代以来の時の流れに思いを馳せる



大坊山の麓の長林寺↑と
境内の庚申塔塚↓



↑登り始めは奥ノ院への長〜い階段
↓大きな天狗の面が鎮座していた



← →



かすかに見える白峰は…



やつと本物の大坊山頂
間近に見る修験行者



広々とした大坊山の山頂

かつて大きな堂宇があったことをしのぼせるが、落雷で焼失とか、今は小さな祠が一つ



→ 大山祇神社
長〜い石段を下りると



※ 大坊山植物図鑑



トウカエデ (幹)



ヤマツツジ (返り花?)



アオダモ (実)



ヒサカキ (実)



ヒイラギ



リョウブ (実)



ネジキ (実と赤い枝)



センダン (実)

エノキの方言について

日本全国のエノキの方言を調べれば、いくつかあると思う。月報第38号が届き、そのお礼方々、阿部隊長と話していた。エノキのことが出ているのでこの話となり、関西の方言に「ヨノミ」というのがあると言うと、隊長は関東、あるいは栃木のことで「ヨノキ」と呼ばれているという。私が子供のころ、エノキの熟した実は甘く、おやつがわりによく食べていた。実を持っていたので、当時の古老はヨノミだと教えてくれた。ヨノ木の実だからヨノミと言ったのかも知れない。ヨとはヒヨドリのことであり、ヒヨドリが好んで食べるからだと言う。松や杉など、全国的に呼ばれている名前のももあるが、現代のようにテレビやパソコンが普及していない昔から広く同じ名前ものは雑木では少ない。方言が多いほどそれだけ人との結びつきが多いと言えるのが、1つの発見であった。



エノキの実

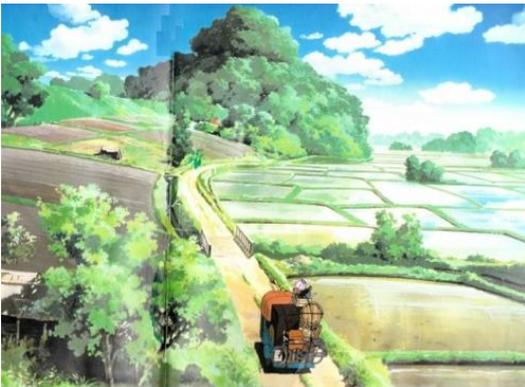
茂呂山の自然を考える

月報第37号の16ページに阿部先生は「ささやいてほしいヤマナラシ」で茂呂山の危機のことも語られている。鹿沼にいたとき茂呂山に何年も通い、出会った人から山を公園化していることを聞いたことがある。それほど遠くない鹿沼工業団地内の道路沿いに児子沼公園^{ちごぬま}という細長い公園がある。昼間はゲートボールを楽しむ人や休憩時間に散歩する人で賑わっているが、夜になると一変し関東一円から変な人が集まる悪名高い公園である。そのため藪を刈り、多くの木を切つて見通しを良くしたので、楽しみにしていた食べられるキノコや椎の実拾いも望めなくなった。茂呂山でも懸念し、公園化も兼ねて下草や灌木を伐採し見通しのよようにしていることはまちがいないと思う。こうなると風通しがよくなるため、山の乾燥化が進み、植物相が貧弱になる。野鳥の森とうたっているのだから、私もこれだけは避けてもらいたいと思う。茂呂山の大きな木はホオノキやモミ、キハダがある。奥日光からこの地まで美しい森が発達していたことを物語る数少ない貴重な生き証人である。余談だが私が鹿沼にいたときラフォーレ北原にいた。ラ・フォーレ(la forêt)は美しい森というフランス語である。これ以上開発をすすめれば、これらの樹木もなくなり無

味乾燥とした、ただの丘に変わり果てるだろう。春はシロツペ(コシアブラ)、梅雨どきからはタマゴタケ、秋はクリの実ひらいやヤマノイモ、クリタケ狩りを楽しむ人がいる。茂呂山は自然を守りつつ何でもかんでも採集禁止にするのではなく、これからも人々に愛されつづける山であってほしい。そのためにも、これ以上の乱開発は避けるべきである。

壊すのは早い、再生させるのは気の遠くなる長い年月を要することを肝に銘じてほしい。田舎の人は便利のよい都会を憧れ、都会の人は田舎を憧れるという。そこで考えてもらいたい。映画アニメ『となりのトトロ』が今も人気があるのは、トトロのみならず、そこに忠実に描写されている田園風景にある。自然を損ねることなく村と自然とが一体化している。これこそが自然とうまくつきあう、理想的な姿である。自然から遠くはなれても人は自然の一員であるからこそ、自然が残る田舎にあこがれるのです。すでに開発された地域にはトトロの森は望めない。鹿沼市では茂呂山など、まだ多くの自然が残っている。同じ自然でも井戸湿原のような貴重な植物が多く残っているところはちがうので、自然を守りながら先ほども述べたように人に愛される自然であってほしい。スギやヒノキ林でも緑であれば自然だと思っている人が多いが、これはとんでもない間違いである。自然林を愛し、残した山村は今もいろんな山の恵みでうるおっていることを理解してほしいのです。皆さんは、どう思われるでしょうか。意見をお待ちしています。今までの月報とはちがひ、多くの会員のみなさんが参加して、更にレベルアップした内容に進化させていく時にきていると思います。

(山口龍治)



『となりのトトロ』より

背景は風景画専門のスタッフが当たり特に緑色の多様性にはこだわったという

白坂正治氏よりおたよりです。

前略

今年初の月報ありがとうございました。

書の一字一字に阿部様の自然が息づいていますね。

“出会いについて”含蓄のある一文に惹きつかれるようにかねてから思う“出合いは別れのはじまり、別れるは再会のはじまり”が口を衝いて出、改めて思索の力を感じたところです。「著書目録」は書影の割合は別にして三島や芥川や松本清張等何人かは出ているように記憶しています。山岳書は書影に注目すると稀覯書中心なら小林義正「山と書物」2冊、高橋啓介「山の限定本」を挙げることはできましょう。個人のは、少なくとも市販ではないようですね。「東武古書の市」郷土本充実の御話で1冊びーんときたのは昭和37年初版(43年再版)の「栃木の文学」。県内高校の副読本との由で鹿沼の人では半田良平氏の短歌が収録。ゆかりのある文学作品として田部先生の“湯の湖”が選ばれたのは嬉しいことで栃木の高校生がうらやましく思ったことでした。 草々

‘16 2/7

誌面を借りてお返事差し上げます。

「栃木の文学」(昭和37年)は気がつきませんでした。「探究諸目録」に入れておきたいと思います。田部先生の「湯の湖」は先生の著書の中に収録されていますか。私の入手した本の中に「栃木県の文学散歩」(昭和54年、栃の葉書房)がありました。鹿沼では「半田良平」「千葉省三」、光太寺の「芭蕉の笠塚」が取り上げられています。「江連白潮」が取り上げられていないな、と思って巻末を見てみたら、編著「栃木県文学散歩の会」の会員、「半田良平」の項の執筆者でした。本名は江連亀吉、元鹿沼市立北小学校校長です。(阿部良司)



三木清ののこした哲学・人生論

月報第39号より3回くらいにわたって表紙の本で三木清を取り上げようと思っていた。月報創刊号でも『人生論ノート』は取り上げたが、当初は、本会の毎月の行事の案内と報告を記録しておくための月報と考えていたので、「表紙の本」は単に表紙を美しい物で飾りたい、愛書家として良い本を紹介したい、そんなことに意を用いたので、書影を載せるのみで済ましてしまった。創刊号から文庫本は淋しかったけれど。

小学校、中学校、高校と国語の教科書はどんな内容であったらうか。おそらく卒業と同時に、とは言わずともいつか処分してしまったのだから、表紙の絵さえも覚えていない。国語の教科書だけは取っておくべきだったと惜しい思いである。

国語の教科書にどんな作品が載っていたか、全て忘れてしまったのに等しいけれど、ただ一つ覚えている文章、それが高校時代の教科書にあった『人生論ノート』中の「旅について」であった。

子供の時分、植物、というより植木が好きであった父に連れられて板荷や大芦の山に植木取りに行っていた私は、高校に入学して、姉から「毎月のように山登りに行っているよ」と聞いていた山岳部に入部した。私はおそらく板荷や大芦などの藪山に登るのだらうと思っていたのである。ところがいざ入部してみると、まずは新人歓迎登山と称して古峰ヶ原の三枚石、次は電車に乗って女峰山の黒岩尾根や黒捨岳、そしてついには夏山合宿なるものが計画され、剣岳、立山に行く、という話になった。剣岳、立山は富士山(ふじやま)での厳しいトレーニングで水を飲みすぎ、お腹をこわして参加することができなかったが、このようにして、私は山を通して旅の味を覚えたのだらうと思う。したがって、それは何年生の時だったか忘れたが、その頃の国語教科書に載っていた「旅について」を読んで、共感するものがあつたのだらうと思う。大学でも「哲学概論」とかいう講義は取ったはずだけれど、難しくて理解できないし、興味ある内容ではなかった。他の哲学者がどんな人生論を書いているのか私にはわからないが、三木清は私たちが生きて行く上で必ず出会うであろう精神的事象について哲学的に分析し、わかりやすい文章、いわば文学として表現したところにその貢献が

あるのだと思う。彼が哲学者として、のみならず文学者として紹介されるのはそのためであろう。

高校の授業で『人生論ノート』が取り上げられたかどうかはわからない。いずれにしても『人生論ノート』との出会いは邂逅である。教科書に載っていなければ、この文章に出合うことはなかった。たとえ載っていても、教科書に一通り目を通さなければ「旅について」に目を留めることはなかったであろう。書物との出会いは邂逅である。しかし、何事も、努力して探そうとしなければ何も起こらない。人と出会っても会話をしなければ何も起こらないように。したがって愛すべき1冊に出会うためには探す、という行動が必要である。そういう点でアンソロジーはありがたいし、白坂氏の言うようにそこには教科書も含むのである。読書論については作家、文学者、哲学者、さまざまな人が書いているが、月報第29号で取り上げた『読書のすすめ』もぜひおすすめしたい本であるし、それぞれの著者の著作物を調べ、著作物を手に取り、さらには序文、目次をひもといいてみることをお勧めしたいと思います。

(阿部良司)

☪ 編集後記 ☪

大坊山行に参加された渡辺、西山両氏のご協力により、本誌に文芸機関誌としての色彩も芽生えてきました。良い傾向ですね。引き続き、山行へのご参加をお願いいたします。

また、会員の皆様の投句、投稿もお待ちしております。俳句・短歌ははがきの裏側に最大3句または3首までを書いて、詩・随筆・紀行等は封書などで、本会事務局までお送りください。挨拶文は不要です。

春よ来い春よ来いとうたふ子ら うたのごとくに春待つわれは 江連白潮



北小学校、校長室の前に歌碑があります。

自然観察クラブ 会費納入のご案内

☆ 年会費（個人または家族） 1,800 円

〃 （会報不要または直接取りに来られる方） 600 円

※ 会報はインターネットでもご覧になれます。

☆ 会費の主な用途

会報発行・発送用諸経費（郵送料、封筒・印刷用紙、インク代等）、
プリンター保守費用、臨時催事の通信、その他



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第41号

2016年2月発行

北光・自然観察クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

（クリーニングハウスあべ内）

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail a2b5r7j7@one.bc9.jp

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

